

## 戊辰戦争と福島藩

1868(慶応4、同年9月に明治改元)年1月、鳥羽・伏見の戦いで戊辰戦争が始まりました。4月に江戸城が明け渡されましたが、新政府軍は会津藩追討のため、攻撃を続けました。

奥羽鎮撫総督府軍事局が長楽寺(舟場町)に置かれ、会津藩討伐を命じられた仙台藩兵が駐留しましたが、政局はめまぐるしく動き、東北の諸藩は仙台藩と米沢藩を中心に4月に会津藩のゆるやかな処分を願い出ましたが却下され、その強行派である新政府軍の世良修蔵を福島城下で殺害して新政府軍との対立を強め、5月には奥羽越列藩同盟を結びました。

福島藩は、江戸藩邸では幕府軍支持を決めましたが、板倉氏の故郷重原(愛知県刈谷市)では、隣の名古屋藩が新政府軍支持を決めたため、これに同調することとしました。しかし、列藩同盟が成立するとこれに加わって、新政府軍と戦うことになり、白河城の攻防では、仙台・二本松藩兵らとともに戦い、多くの犠牲者を出しました。

7月末に二本松藩が降伏すると、福島藩も開城を決めました。しかし、対新政府軍強行派の米沢藩をはじめ、棚倉・仙台・上ノ山藩ら奥羽軍は長楽寺に軍事局を置き、徹底抗戦をはかるなど、福島城下は奥羽軍の前線基地となり、小藩福島藩は揺れ動く政局に振り回される結果となりました。その中で、塗炭の苦しみにあったのは、食糧の供給や物資の輸送に駆り出された農民・町人たちでした。



135.洋式軍装の福島藩士

「戊辰戦争福島藩士出陣之図(部分)」

萱間 開画(市蔵)

1868年7月渋川教之助が藩士5人を率いて中村(相馬市)に、8月内藤魯一が藩士20人を率いて二本松に謝罪嘆願に行き、西軍に属して戦った時の姿。



【上】  
136.長楽寺本堂  
(舟場町)

奥羽鎮撫総督府軍事局が置かれた。

本堂の梁には菊の紋章(勤皇の軍を表す)が残っている。



【右上】  
137.世良修蔵官修墳墓  
(宮町 福島稻荷神社北東隅)

強硬に会津藩討伐を唱えた世良修蔵

は、仙台藩の姉歯武之進らに阿武隈川の川岸(腰浜村字下河原)で斬り殺された。



世良修蔵官修墳墓付近図

## テーマ 20

# みしまみちつね 三島通庸と自由民権運動

けんれい ばんせいたい ろ みしまみちつね  
山形県令(県知事)として1881(明治14)年10月の万世大路開通に努めた三島通庸(1835~1888)

は、翌年1月に福島県令となりました。

当時、福島県は国民の平等・自由・民権を目指す自由民権運動が盛んで、西の土佐、東の福島と言われる程でした。その推進役であったのが河野広中(1849~1923)で、明治14年1月の県会議員改選で当選し、4月には議長に就任していました。

同年10月には、東京で日本最初の全国的政党の自由党が結成され、12月には自由党福島部を河野広中が同志と創設し、県議会は自由党が最大政党となりました。

「火つけ、強盗と自由党はゆるさぬ」とする三島通庸は、翌年の明治15年4月開催の臨時議会、そして定例議会に一度も出席しませんでした。自由党議員は全部の議案を否決する動議を提出し、21対23というわずか2票の差で福島県政に類を見ない議案毎号否決が決議されました。

この件以降、自由民権運動への弾圧が強まり、同年12月の河野広中ほか25名の自由党幹部が捕えられる福島事件が起こりました。

また、三島県令は土木県令とも言われ、福島県令時代に、自ら命名した「松齢橋」(舟橋)の架橋(明治15年)、甚兵衛火事後の町内街路整備などを行いました。1884(明治17)年には高湯温泉から庭坂村への引湯による湯町建設の工事が柴山景綱信夫郡長により進められました。

その後、三島通庸は1884(明治17)年11月に内務省土木局長に異動しました。



138. 河野広中  
(国立国会図書館ウェブ  
サイトから掲載)



139. 『福島奇聞　自由の夜譚』表紙  
1883(明治16)年自由民権運動家を  
風刺を交えて書いた小説。右が三島  
通庸、左が河野広中。  
(福島県立図書館蔵)



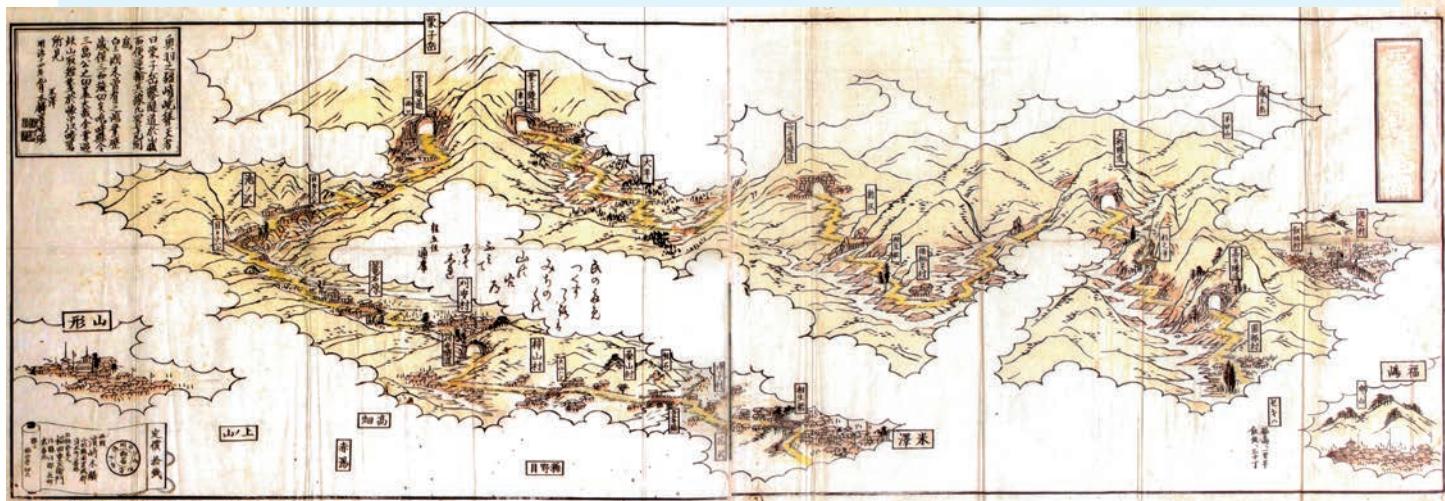
140. 三島通庸  
(国立国会図書館ウェブ  
サイトから掲載)

## コラム ばんせいいたいろ 万世大路

福島と米沢を結ぶ道については、すでに1874(明治7)年には江戸時代の米沢街道とは異なる新道開削の話が持ち上がり、その後福島・山形両県で新道について協議が行われました。1876(明治9)年8月初代の山形県令になつた三島通庸は、トンネルによる栗子山越えの新道開削の計画を推進し、福島県と新道開設について合意し、翌明治10年国の許可を受け、両県による新道の工事が開始されました。

福島町より山形県置賜郡米沢町までの新道の名称は、福島県管内は中野新道、山形県管内は刈安新道と呼びました。難工事でしたが、1881(明治14)年9月に竣工し、羽州街道と命名され、同年10月3日明治天皇を迎えて開通式が行われました。

1882(明治15)年明治天皇の勅定により「万世大路」と命名されました。



141.栗子新道画図(市蔵)明治14年9月

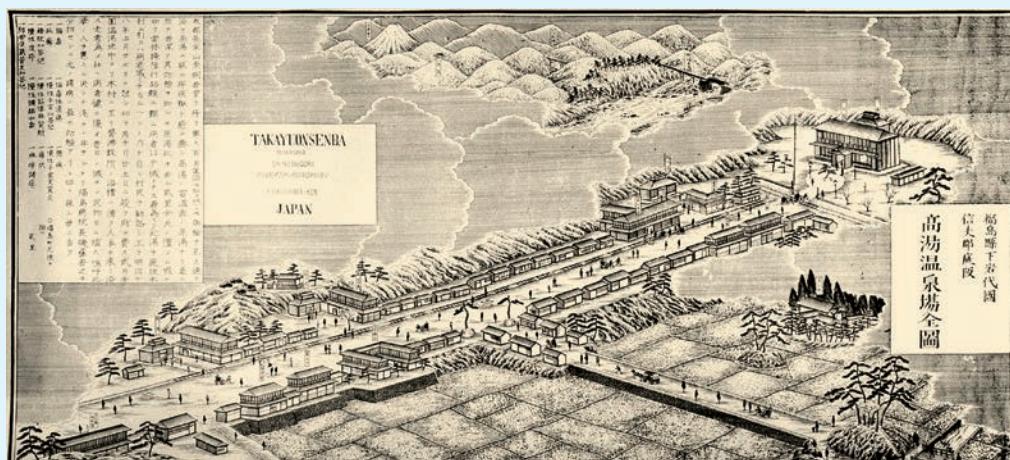
1881(明治14)年9月3日 定価十銭 出版発行人 稲田重左衛門(山形県南置賜郡長町2番地)とある。竣工月に発行されており、開通への大きな期待を感じることができます。図中に「民のため つくす 天路は みちのくの 山の穴道 ふみてこそ知れ 通庸」と書かれています。

## コラム ゆまち 湯町

三島県令時代、柴山景綱信夫郡長の要請で計画されたといわれ、高湯温泉から庭坂村割石(後の湯町)へ引湯し湯町を開設する計画で、1884(明治17)年11月には引湯が許可されました。工事費の大半を信夫郡が負担して工事が開始され、翌1885(明治18)年10月には引湯開通の式典が行われました。

奥羽南線建設工事のための福島出張所が1894(明治27)年に庭坂に設置され、工事最盛期には多くの工事関係者が湯町は繁盛したと言われています。

湯町へは木製湯桶による引湯で、約12kmの長距離であったため各所で破損し、温泉の漏出が甚だしく、飲料水に混流したり、湯の温度が下がるなどにより、客が減少していき、1898(明治31)年営業は中止となりました。



142.湯町の図

(「高湯温泉場全図」)

## 甚兵衛火事からの復興とまちづくり

1881(明治14)年4月25日午後4時30分頃柳町の二階堂甚兵衛方「みどり湯」から出火し、強い西風にあおられ、2~3時間で当時の福島町の約8割(全戸数2155戸、焼失1746戸)が焼けてしまいました。しかし、人々は町の復興に努め、翌年1月には焼失家屋のうち約9割が復興を果たしました。



### 143. 甚兵衛火事類燃図

(県庁文書『明治14年福島大火記録』「福島町火災報告略図」より作成)

設場所を含めて福島町の今後のまちづくりをどう進めていくかが、町内で論議されました。

この時の鉄道会社との交渉役は鐸木三郎兵衛ら7人でした。

最終的に停車場が現場所に決定し、5月から町と停車場予定地の間の広い田園地帯に、鐸木らが中心となり多くの人々の協力を得て新市街地造成が実施され、10月22日竣工式が行われ、現在の駅前通りが完成しました。まちなか広場からJR福島駅までの間の主な道路網はこの時に完成したものです。

当時の県令は狭い道路が大火を招いた原因として、区画整理を町の人々に提案し、新たなまちづくりが始まり、三つの事業が実施されました。

第1次事業(明治14~16年)は、県庁前付近の街路の新設・拡幅事業でした。第2次事業(1884(明治17)年)は、三島通庸県令が推進した事業で、奥州街道の中央を流れていた福島用水の埋設と、街路の改修が主な事業でした。第3次事業(明治17年)は、第1・2次事業以外の街路新設及び拡幅等の改修でした。

こうして、街路の新設・拡幅等の改修事業により現在の旧市内のまちづくりが進む中、

1887(明治20)年、東北本線の開通に伴う福島停車場(現JR福島駅)開設が予定され、その開



144. 現在の駅前通り周辺 現在の道路で明治20年に整備された道路を■線で示した。  
JR福島駅東側の現在の主要な道路が、明治20年に完成したことがわかる。

### コラム 鐸木三郎兵衛(1858~1931)

1858(安政5)年3月現宮城県白石市生まれで、1878(明治11)年福島町鐸木家の家督を相続し、鐸木三郎兵衛(雅号:馬厳)を名乗るようになりました。甚兵衛火事後の区画整理では私財を投じて力を尽くし、福島停車場開設に伴う市街地整備では開修掛として先頭に立って活躍しました。その後、福島町初代助役、三代目町長として福島町の発展に大きな役割を果たしました。さらに、県議会議長、衆議院議員として福島県の発展にも尽くしました。

## 金融機関の整備

甚兵衛火事によって、福島の経済は大打撃を受けました。町内の全ての銀行6店(本店は第六国立銀行、第百七国立銀行、福島銀行の3店)が焼失しましたが、第六国立銀行では公金は無事との報告がありました。

第六国立銀行は、1877(明治10)年県内で最初に福島町に設立されました。第百七国立銀行は1878(明治11)年に、福島銀行は1880(明治13)年に創設されました。これら銀行が設立された背景には、福島町には生糸が集まりその売買がさかんで、その資金が求められたことがあります。しかし、甚兵衛火事以降明治10年代は経済不況が続き、地元銀行は厳しい経営状況となりました。この時期に東北地方で初めての安田銀行福島支店など県外の有力銀行が多く進出してきました。

### コラム 全国8番目の開設 日本銀行福島出張所

1899(明治32)年7月、東北地方初の日本銀行福島出張所が、現在地に開設されました。

開設された理由は、

- ・福島町で東北二大鉄道(東北本線・奥羽南線)が交わり、交通運搬の要衝であったこと。
- ・生糸が日本の輸出品のうち最も重要で、福島町周辺は日本でも有数の生糸の産出地域であったこと。
- ・福島町は生糸取引高が東北全体の大部分を占め、金融の中心も福島町であること、と言われています。



145. 日本銀行福島出張所

## 東北本線の開通

1881(明治14)年設立された民間の日本鉄道株式会社によって、東北本線の鉄道敷設は行われました。

1885(明治18)年7月大宮～宇都宮間が開通し、翌年8月には白河～福島間の工事が着工されました。

県北地方の養蚕地帯では鉄道敷設への反対運動がありました。1887(明治20)年12月15日郡山～仙台間が開通し、福島停車場(JR福島駅)が開業しました。開業当初、現在の福島市内での開業停車場は福島と松川だけでした。1891(明治24)年には青森まで開通しました。



146.開通当時の機関車と福島停車場

## 奥羽南線の開通

1892(明治25)年福島～青森間の鉄道敷設が決定し、鉄道庁により測量が行われました。明治26年、鉄道庁は、福島から湯沢(秋田県)へ、また青森から湯沢へ向かってそれぞれ工事を進めることを決め、福島～湯沢間を奥羽南線として福島建築出張所、湯沢～青森間を奥羽北線として青森建築出張所が当初担当することになりました。

庭坂と米沢(山形県)の間には松川、板谷峠などがあり、松川橋梁や板谷峠トンネル(隧道)など難工事でした。トンネル工事では多量に煉瓦が使用されるため、野田村笹木野に煉瓦工場がつくれられました。

1899(明治32)年5月15日奥羽南線福島～米沢間は開通しました。

## コラム 煉瓦工場(下野寺字山神)

奥羽南線工事のため野田村笹木野に煉瓦工場が開設されたことが「福島八景の碑」(岩谷觀音)裏面の「福島煉瓦業の碑」に刻まれています。碑建立の経過は不明ですが、伊豆国上河津村(現静岡県加茂郡河津町)の稻葉常松、陸前国松岩村(現宮城県気仙沼市)の畠山六兵衛、岩代国山都村(現喜多方市)の小澤昌次の三人により煉瓦土管製造を開始したとあります。

工場開設は1893(明治26)年6月で、明治37年に業務拡張のため下野寺字山神に移転し、その後太平産業株式会社福島煉瓦工場となり、1966(昭和41)年に工場閉鎖と言われています。

山神地内には煉瓦造りの山神神社があり、その境内には稲葉常松らが寄進した珍しい素焼きの灯籠があります。



147.福島八景の碑



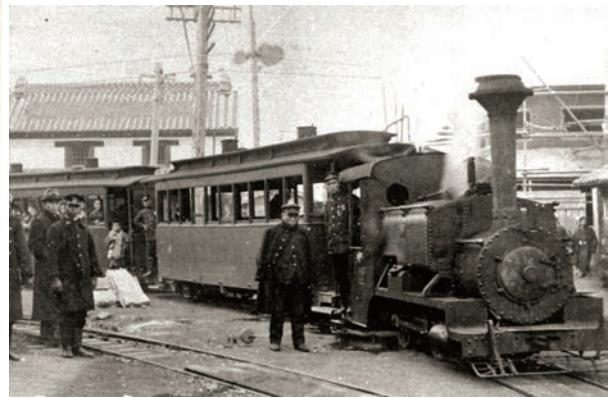
148.煉瓦工場と作業風景



149.山神神社(左)と寄進された灯籠(右)

## 信達軌道の開通

1906(明治39)年3月鐵道国有法が公布され、國內鉄道のほとんどが国有化され、私設鉄道は地方の小規模な鉄道のみとなりました。



同年9月、甲州(山梨県)の実業家雨宮敬次郎の

### 150. 開通当時の軽便鉄道機関車

呼びかけで、福島町公会堂に信達両郡の有力者が集まり、軽便鉄道敷設について協議し、敷設内容、発起人、創立委員選出等を決めました。そして、雨宮敬次郎と信達両郡の有力者30名の発起人により国に特許を申請し許可されました。資金は雨宮と地元が半額負担とし、明治40年11月雨宮社長名で信達軌道株式会社成立届(本社:福島市栄町32番地)が出され、蚕種・生糸などの輸送に大きな役割を果たすことになります。

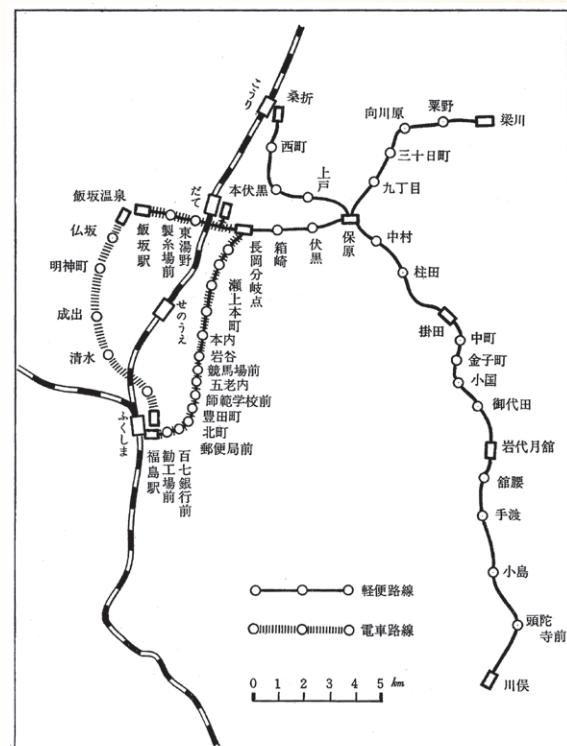
1908(明治41)年の奥羽六県連合共進会開催に合わせ、4月14日福島~長岡(現伊達市長岡)~湯野間の軽便鉄道が開通し、7月に長岡~保原間も開通しました。

また、4月の臨時株主総会で、信達軌道株式会社を含む地方軌道会社8社の合併が決議され、大日本軌道株式会社(雨宮敬次郎社長)が創立され、信達軌道株式会社は福島支社となりました。その後、1917(大正6)年9月地元有力者のみで新たな信達軌道株式会社(本社:長岡村)を設立し、大日本軌道株式会社から軌道敷設の特許が譲られました。

しかし、1922(大正11)年5月19日に蒸気機関車の煙突の火の粉が原因となり、46戸が全焼する本内大火がおこり、電化への強い声があがりました。

信達軌道株式会社は大正14年12月名称を福島電気鉄道株式会社に変更し、翌年4月福島~長岡~飯坂間から順次電化を進めました。路面電車(チンチン電車)の誕生です(昭和46年廃止)。

また、1920(大正9)年蒸気機関車での福島~飯坂間の軌道許可を得て、翌年8月設立された飯坂軌道株式会社は、同年10月福島飯坂電気軌道株式会社と改称し、1924(大正13)年4月福島~現花水坂間の電車運行を開始し、1927(昭和2)年現飯坂温泉駅まで延長しました。



### 151. 飯坂軌道及び福島電気鉄道運行路線図

(大正15年)

図中の飯坂温泉駅は現花水坂駅。

飯坂駅は後の湯野町駅。

## 近代の教育制度：寺子屋から学校へ

1872(明治5)年に学制が公布されると全国の町や村に小学校が設けられ、近代の教育制度が始まりました。多くは寺院や民家を間借りしての開校で、授業も藩校や寺子屋の師匠が担当するなど、近代の教育は建物も内容も手探りの状態で始まりました。やがて1879(明治12)年に教育令が、1886(明治19)年に学校令が公布されるなど教育制度はしだいに整えられていきます。その間、各町村と住民の努力により独立した校舎が建設され、教員の養成機関として、曲折を経て福島師範学校(現福島大学人間発達文化学類)が開設されました。

このような学校教育の黎明期の福島で教え、学んだ親子がいます。立子山の小学校長を務めた朝河正澄と、その子で世界的な歴史学者である朝河貫一です。

1874(明治7)年、二本松藩士であった正澄は立子山小学校の校長として招かれ、一時は校舎のあった天正寺に住んでいました。貫一も父の教えを受けながら幼少期を立子山で過ごし、その神童ぶりから「朝河天神」と呼ばれるほどでした。後に米国エール大学の教授となり、日米の平和のために奔走しました。天正寺には貫一が4歳の時に書いた馬の落書きが残されています。正澄は村の教育に力を尽くし、後に立子山が模範村として表彰される気風の礎を築きました。



152.立子山小で学んだ  
朝河貫一(1873~1948)  
(提供:二本松市教育委員会)



153.貫一の書いた落書き  
(天正寺)

## コラム 令和まであった明治の学び舎

松川町金沢の永仁寺の前に、明治に建てられた校舎が令和まで残っています。旧金谷川小学校金沢分校です。同校は1875(明治8)年に八丁目小学校第二支校として永仁寺を仮校舎に開校し、翌1876(明治9)年に金沢小学校と改称しました。のちに金谷川小学校の分校になり、1969(昭和44)年の廃校まで多くの子どもたちがここで学びました。この建物は、1885(明治18)年起工、1886(明治19)年落成と伝わり、現在は取り壊されました。



154.静かにたたずんでいた旧金沢分校 旧金沢分校付近図

## 尋常小学校～国民学校～新制小学校へ

1872(明治5)年の学制公布以来、新しい時代を担う人材の育成は国家の急務とされ、試行錯誤の中で法令はたびたび変更されました。今では当たり前となった小学校6年、中学校3年という義務教育のあり方は戦後の学制改革によるもので、戦前の教育制度では義務教育は小学校まででした。

さらに教育を受けたい人は、現在の高等学校に相当する中学校や高等女学校、実業学校などに進みました。福島中学校(現県立福島高校)、福島高等女学校(現橘高校)、福島商業学校(現福島商業高校)、蚕業学校や信夫農学校(いずれも現福島明成高校)が明治時代に設立され、これらの学校からは今まで各分野に多くの人材を輩出してきました。



155. 松川小学校(松川町)



156. 福島中学校(森合町)



157. 蚕業学校(渡利)



158. 福島師範学校  
(杉妻町)  
(のち女子師範学校等として使用)

### 福島の学び舎

小学校は地区の子どもたちの学びの場として地域の協力のもと設立された。また中学校や実業学校には周辺から多くの進学者が集まった。



### コラム シスター・ローズ・コーチョン～桜の聖母の創始者

1932(昭和7)年にカナダから5人の修道女が福島を訪れました。彼女たちが所属するコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会は学校での教育活動を行っており、日本での活動拠点として福島を選んだのです。シスター・ローズ・コーチョン(Sister Rose Cauchon)はそのひとりで、いろいろな困難をのりこえて修道院、診療所を設立し、1938(昭和13)年に雛菊幼稚園(現桜の聖母学院幼稚園)を設立し、園長を務めました。彼女たちは幼稚園での教育だけでなく、福島の人々のために音楽や語学、手芸、料理などの教室を開き、暮らしの貧しい人々の家を一軒ずつ訪問し、彼らの生活が少しでも良くなるように働きました。第二次世界大戦によって園の運営が一時中断され、自身も会津若松市に移住させられましたが、終戦後に活動を再開し、1946(昭和21)年には桜の聖母初等学校(現桜の聖母学院小学校)を開設、続いて中学校、高校、短大を相次いで設立し、後に東京で修道会日本管区の初代管区長となり、1993(平成5)年に亡くなりました。彼女は、日本の自然や文化、伝統芸術を大切にし、ときには日本人の言葉づかいを注意するほど日本語を大事に考えていました。



159. カナダからの5人の修道女たち

左から2人目がシスター・ローズ・コーチョン  
(提供:コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会 桜の聖母学院)

1907(明治40)年4月1日に福島市は誕生しました。人口は3万2524人、世帯数5582で、町役場(当時杉妻町)を市役所としました。

6月には初の市議会議員選挙があり、市議会で二宮哲三(1870~1937)を市長第一候補として内申し、7月に初代市長として就任しました。1925(大正14)年に退任するまで、二宮市長により上下水道整備、文化施設の整備、教育環境整備、市営住宅建設、道路整備等の都市の生活基盤事業が広範囲に行われました。

市民生活に欠かせない飲料水の確保のため、弁天山浄水場を設置し阿武隈川から取水する上水道工事は大正14年に完成し、松齡橋も完成しました。下水道工事では市内を流れていた用水路の整備を行いました。

市営住宅は、1920(大正9)年から建設が始まり、1927(昭和2)年までには199戸が建設されました。市営火葬場は大正9年9月に新築され、市の福島職業紹介所が1925(大正14)年6月に開設されました。文化施設では、1917(大正6)年に御大典(大正天皇即位)記念事業として、現在地に木造ゴシック式の公会堂が完成しました。

教育環境整備では、1913(大正2)年に私立福島成蹊女学校が設立され、また、二宮市長の誘致活動もあり、1922(大正11)年福島高等商業学校(現福島大学経済経営学類)が新設されました。

これらの整備には巨額の費用が必要でした。景気の移り変わりがはげしい時代で、第一次世界大戦後の不況の影響などから、昭和元年には市の借金は200万円を超え、厳しい財政状況となりました。

1918(大正7)年には、大島要三が中心となり誘致活動を行った福島競馬場が、市の支援などを得て、現在地に開場しました。



160.二宮哲三 市長

### コラム 福島競馬場生みの親 大島要三

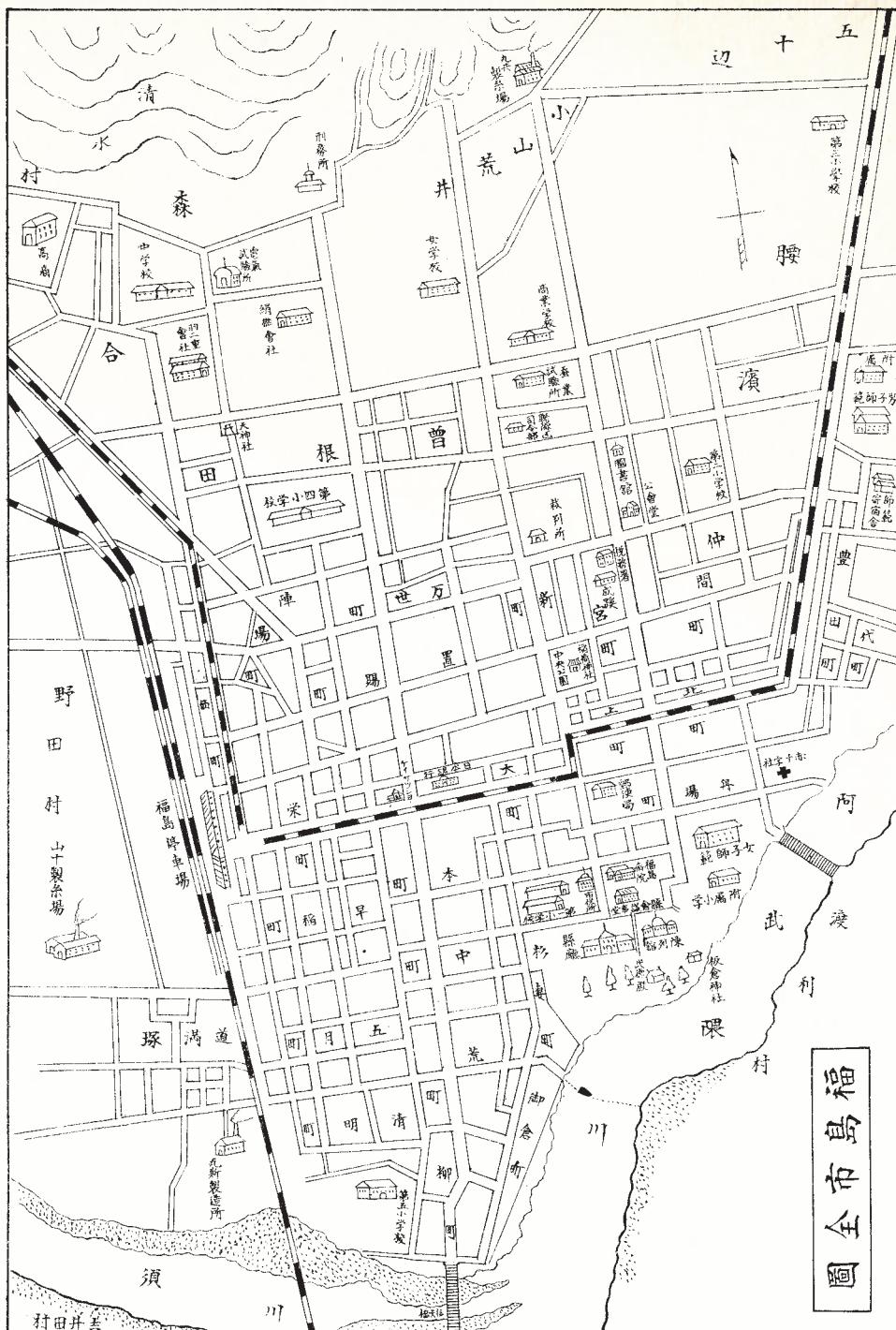
大島要三(1859~1932)は埼玉県北埼玉郡大桑村(現加須市)生まれで、奥羽南線の板谷の難工事を完成させ、その名声が高まりました。

その後福島町に移り住み、1907(明治40)年設立の信達軌道株式会社取締役、福島電燈株式会社社長などを歴任し、福島市初の市議会議員に当選し、福島市発展に貢献しました。

その功績で最も知られているのが福島競馬場の開設です。当時の郡山開成山競馬場は公認競馬場でなく、「福島競馬会」の伊藤彌が公認競馬場誘致(藤枝競馬俱楽部の譲渡)を大島要三に強く訴えました。大島は二宮市長をはじめ経済界を説得し、市をあげての公認競馬場誘致を行い、1918(大正7)年1月に福島競馬俱楽部が誕生しました。その後大島は会頭として、土地会社を設立し一般から株主を募集し、3月工事着工し、6月28日記念すべき第一回福島競馬が開催されました。



161.大島要三銅像  
(信夫山公園)



(福島市小学校用『郷土読本』福島市教務会(大正15年2月発行)より)



164. 遷信省電気試験所福島出張所  
(現:福島市写真美術館) (大正11年)



165. \*福島高等商業学校(大正10年)



166. \*福島県師範学校(大正12年)



167. 福島市公会堂(大正6年)



168. \*福島税務署(大正3年)



162. \*福島郵便局(大正7年)



163. \*福島第二尋常小学校  
(大正14年)

- ・( )内は竣工年。
- ・日本銀行福島支店・福島県農工銀行(大正2年)、安田銀行福島支店(大正15年)は69ページで紹介している。
- ・\*印の写真は、『福島案内』(昭和6年)より